

歴史は未来の羅針盤

温故知新

これまでに刊行しました『近江日野の歴史』は、第一巻「自然・古代編」、第二巻「中世編」、第五巻「文化財編」、第六巻「民俗編」、第七巻「日野商人編」、第八巻「史料編」となりました。教育委員会や各公民館などにおいて、一冊四、〇〇〇円で好評販売中ですので、ぜひともお買い求めください。

島崎利兵衛家と谷田部藩

『近江日野の歴史』第七巻「日野商人編」を発売して以来、日野商人の活動の様子をさまざまな視点から紹介しています。今回は、日野商人と領主の関係について紹介します。

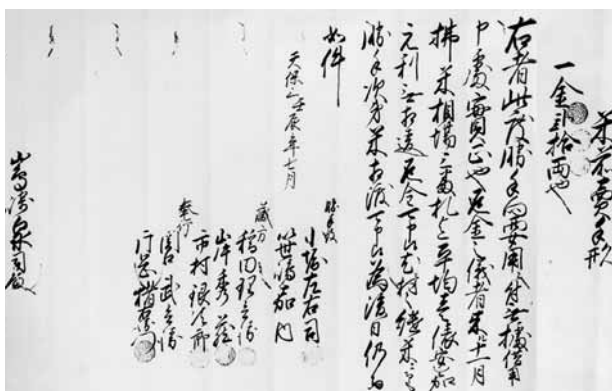
日野商人と領主

日野商人が商売に成功し、資産を増大させていくと、領主はその財力を頼ってきました。特に、江戸時代後期になり、領主財政が困窮してくると、領主たちは、財政の不足を補うため、日野商人たちに対して借金の申し入れや御用金（商人らに臨時に上納を求めた金銭）などを要求してきました。領主によるこのような金銭の要求は、本宅のある日野の領主だけでなく、出店先の領主からもありました。ここでは、その一例として島崎利兵衛家について紹介します。

島崎利兵衛家は、大窪町出身で、元禄十六（一七〇三）年に下野国茂木（栃木県芳賀郡茂木町）に出店し、酒造業を始めました。その後、黒羽（同県大田原市）・氏家（同県さくら市）・山内（同県芳賀郡茂木町）・鳥山（同県那須烏山市）・千本中根（同県芳賀郡茂木町）にも出店を構え、酒・醤油の醸造・販売のほか、質屋業や貸金業などを展開しました。

江戸時代後期の谷田部藩では、多くの藩と同様に、財政難に陥り、天保五（一八三四）年には一三万四八四〇両もの借金を抱えるまでになっていました。そのため、谷田部藩は財政の立直しを始め、弘化三（一八四六）年には三万七二二四両まで減額させることに成功しました。この谷田部藩の財政立て直しに、藩の御用商人を務めていた島崎家は、大きく貢献しました。

本店の茂木店は、谷田部藩（陣屋は茂木と谷田部（茨城県ひたちなか市）に設けられていた）に属しており、島崎家は藩の御用商人を務めていました。



▲米前売手形

と充てていました。天保三（一八三二）年七月の「米前売手形」の表題をもつ史料には、谷田部藩の役人七名の連名で、金二〇両を島崎家から借用し、その返金は十一月の払米をもって充てると記しています。

また、島崎家は谷田部藩に多くの金銭を貸していましたが、谷田部藩の財政立て直しの際には、金九四一両一分・銀二匁九厘の藩への貸金などを帳消しにした上で、さらに米・金の立て替えを申し出ました。このように、島崎家は、谷田部藩の借金減額に積極的に協力しており、藩にとって不可欠な存在でした。そのため、藩ではこのことを賞し、武士身分と扶持（給与）を与えました。家臣の名前や役職などについて記された、嘉永元（一八四八）年の『家中分限帳』には、一〇人扶持で米一七石が与えられたことが記されています。

なお、茂木店は、国許の領主である水口藩や氏家店のあった地域の領主である宇都宮藩なども金銭の貸借関係があったようです。

*名前等読みが定かでないものはふりがなを書いていません。